

アムステルダム音楽学校における幼児ピアノ教育 —導入としての即興演奏に着目して—

多田 愉可*

Piano training for little children in Amsterdam Music School
Focusing on improvisation as introductions

Yuka TADA

Recently, music education for infants that introduce eurhythmics has become popular in Japan. Music education is important for infants to cultivate their sentiments, and it is now introduced early in preschool education, using eurhythmics. How are the abilities of babies developed through early music education. This study examined the state of music education for children, by referring to the childhood music education program conducted at the Amsterdam Music School, in Amsterdam, Netherlands. In the study, eurhythmics, practical skills training, and especially improvisation in piano training were focused on.

キーワード：幼児音楽教育 preschool music education、即興演奏 improvisation、ピアノ学習 piano training

I はじめに

最近の研究では、行動観察によって行われてきた心理学的研究だけでなく、赤ちゃんの能力が脳科学研究によって明らかになり始めている。その結果として赤ちゃんはかなり早い時期から言語、数そして音楽を学習することができる能力、スタートアップ・プログラムを持っていると言われている。¹⁾ 近年、日本においてもリトミックを取り入れた乳幼児音楽教育が盛んに行われている。情操教育としての音楽教育は、とくに幼児にとって必要であることは疑う余地もなく、リトミックなどによる音楽教育は早い時期から取り入れられている。早期音楽教育によって、赤ちゃんが持ち備えていると言われる能力は、どのように発達し、彼らの音楽教育に影響を及ぼすのであろうか。そ

こで、オランダ王国アムステルダム市内にある、アムステルダム音楽学校での幼児音楽教育プログラムを参考に、リトミック、そして、実技レッスン、とりわけピアノレッスンを中心に、幼児や子どもたちの音楽教育の在り方をみてゆく。アムステルダム音楽学校での教育プログラムをとりあげることにより、そこで行われている定期的なオリエンテーションとしての楽器体験や、レッスンにおける子どもたちの即興演奏の必要性について考察したい。日本では一般的に即興演奏を創作活動の一つとして捉えられている。現在の日本の学校教育において、「創作活動」を重要視する傾向にあり、創作を通した音楽による表現について、その指導や評価は、学校指導要領の中で、重要性が示されている。「創作活動」は特別な音楽活動と捉えられ、指導者にとっても即興的な音楽表現は他の音楽活動に比べ、その指導は容易ではない。「創作活動」で必要となるリズム、メロディー、ハーモニーを即興的に組み合わせる訓練をすることに

* 広島文化学園大学 Hiroshima Bunka Gakuen University
学芸学部 Faculty of Arts and Sciences
音楽学科 Department of Music

よって、「創作活動」は総合的な音楽活動として、表現力を伸ばす最も意味のある音楽活動とも成り得る。「即興演奏」を、特別な能力と捉えられがちな日本の音楽教育では、実技レッスンの中で即興演奏を経験することは稀である。日本の音楽教育では、ヤマハ音楽教室の取り組みの一つである、音楽技能検定のための特別な訓練として即興演奏指導がなされている。アムステルダム音楽学校では、幼児音楽教育から即興演奏を取り入れ、ピアノの経験のない幼児も鍵盤を使って指導者から与えられる「雨」、「太陽」などのイメージしやすいテーマを音で表現している（写真1）。その表現力は演奏に必要な表現力につながることは容易に予想される。演奏技術のレベルが高いとされる日本のピアノ学習者の演奏が、機械的で退屈だと言われ続けている理由として、表現力を身に着けることを重要視してこなかった点が挙げられる。幼児期に即興演奏能力を引き出す音楽教育を行っているアムステルダム音楽学校の子どもたちは、即興演奏に抵抗がなく、また即興を楽しんでいる。音遊びとしての即興から、和声的な即興、アンサンブルにおける即興など、実技レッスンの中でも即興演奏は取り入れられている。本来、即興演奏能力は子どもが潜在的に持つ能力ではないだろうか。日本の幼児音楽教育においても即興演奏は重要な音楽活動となり得ると考える。



写真1 キーボードによる即興演奏

I-1 即興演奏の意義

広義には、即興演奏は「決められた楽譜にたよらず、演奏者が即座に作曲しながら演奏すること」である。バロック時代の通奏低音等、クラシック音楽には即興演奏が不可欠であった。現在も、オルガン演奏ではしばしば即興演奏がなされる。即興演奏はその表現を評価する基準がない。また即

興演奏はほとんど録音されることも記譜されることもなく、音楽教育において指導されることは稀であった。しかしながら、近年、芸術における即興能力は音楽家にとって大変重要なスキルであることが言われている。G. マクファーソンは即興演奏能力に関する実験から、即興演奏能力は音楽の他の演奏能力に関わることを報告している²⁾。創作や即興演奏は演奏能力と区別されがちであるが、演奏能力と即興能力は大きく関わる事が明らかとなっている。

I-2 即興演奏の歴史

即興演奏は歴史的観点から演奏家に必要な能力とされてきた。教会のオルガニストにとって即興演奏能力は必要不可欠であり、西洋音楽の中で即興演奏は重要な位置を占めていた。また、作曲家たちは即興演奏により聴衆を魅了してきた。リズム感、和声感、拍子感、テンポ感等、音楽を構成する全ての要素を理解することが即興演奏能力を伸ばすことにもつながると考える。

II アムステルダム音楽学校における音楽教育

II-1 アムステルダム音楽学校の歴史

アムステルダム音楽学校（Muziekschool van Amsterdam）は、アムステルダム国民音楽学校として1932年にWillem Gehrels（1885-1971）が創設した。彼はアムステルダム市出身の教育者であり、オランダの音楽教育を築いた人物である。W. Gehrelsはヴァイオリニストでもあり、教員の資格を取得した後は小学校教諭、国立オペラ座合唱団の指揮者を務める。1932年、現在のアムステルダム音楽学校の礎となる国民音楽学校での指導を始め、1934年、W. Gehrelsは全ての子どもたちに音楽教育を受けさせることをライフワークとして、国民音楽学校をNieuwe Kerkstraatに設立した。現在もアムステルダム音楽学校として、その姿を残している（写真2）。当時、オランダ王国では上流階級の子もだけが音楽を学ぶ機会を得ていた。音楽教育学を学んだW. Gehrelsは子どもの教育には音楽が必要であるという信念を持ち、全ての子どもたち、また成人した大人のための国民音楽学校の設立のため、優秀な教員、そして資金を集めることに東奔西走した。W. Gehrelsは

1940年にアムステルダム音楽院（conservatorium van Amsterdam）における教育学の講師として就任している。



写真2 アムステルダム音楽学校 Nieuw Kerkstraat
147, Amsterdam

II-2 アムステルダム音楽学校の幼児音楽教育

アムステルダム音楽学校は市内4か所、いずれも小学校、また図書館の近くに存在する。0歳児から大人まで音楽を学ぶことができ、親子のための音楽教育、子どものための音楽教育、音楽院に進学するための専門的な音楽教育、生涯教育としての音楽教育を受けることができる。これまで、オランダ王国では、学校教育における音楽教育は存在していなかったため、音楽を学ぶためには音楽学校へ通い、生徒は楽器の奏法を学ぶことを通して音楽を勉強し、音楽に親しんできた。現在、オランダ王国では学校教育における音楽教育についての新しいカリキュラムが作成されつつあり、音楽教育の転換期を向かえている。アムステルダム音楽学校のスケジュールは月曜日から土曜日まで、週1回の個人レッスン、グループレッスン、アンサンブルレッスンが行われている。レベルは様々で、グループレッスンはレベルによって分けられている。5歳児のオリエンテーションクラスは25～30名の楽器初心者で組まれており、彼らは1年間を通して様々な楽器に触れながら、歌やリズム遊びを中心に音楽の基礎を学ぶ。（写真3）幼児コースは次のとおりである。

- ① 1～3歳の幼児コース・・・感受性を養うことを目的とし、音楽を体験することを中心としたコースである。幼児はリズム、言語、音、音色に非常に敏感である。このコースでは親子で音楽を楽しむための1時間の歌を中心に

したコースである。（親や保護者の同伴）

- ② グループ1（動きによる音楽的経験）・・・音楽を遊びとして取り入れる。表情、動き、歌、演奏、聴くことを通して、想像力を発展させる。
- ③ グループ2, 3（発見による音楽的経験）・・・初級レベルの音楽的な発見や実験に焦点を当てる。
- ④ グループ4, 5, 6, 7（実験と習得による音楽的経験）・・・楽器の演奏と歌うことを学び、このグループにおいて一緒に演奏することを体験する。

5歳以上の子どもは器楽コースにおける個人レッスンにより楽器の奏法を学ぶことができる。それ以前のグループ2～7においてはオリエンテーションとしてレッスンとそれぞれ楽器の指導者によるプレゼンテーションを通し、子どもたちは興味を持った様々な楽器を体験し、学ぶ。



写真3 5歳児オリエンテーション

II-3 教材

教材についてはクラシック音楽に限らず、ポピュラー音楽、ジャズ音楽、民族音楽等、それぞれのレベルに合わせた教材を使用している。アンサンブルのクラスにおいては異年齢グループによって、そのグループの楽器編成と各生徒のレベルに合わせた編曲を指導者が手掛け、どのパートにもソロを即興で演奏する小節が作られている。筆者がビデオ撮影を行ったアンサンブルのクラスでは、単純に繰り返されるコード進行をベースに各楽器が順番に即興演奏をしていくグループ即興であった。また、オランダにおけるピアノ実技レッスンの入門として使われる、de Haske出版のレ

オナード（“Hal Leonard”）のピアノメソッドは、即興演奏指導に適している。

Ⅲ 即興演奏の実践例

アムステルダム音楽学校では楽器初心者のためのオリエンテーションの中で、子どもたちに即興演奏を通して楽器に触れさせている。その際、指導者は「太陽」「風」「雨」など、イメージしやすい課題を与え、伴奏をすることで子どもたちの即興演奏をリードしている。ピアノ学習導入として使用されるレオナード「Lesboek Deel 1」の最初の課題はリズム打ちである。遅いテンポ、少し速いテンポ、で4分音符を刻む。それに合わせて、指導者はフラット6つの変ト長調、4分の4拍子で伴奏をする。次に生徒は黒鍵を使ってリズムを刻む。指導者はそれを伴奏に、黒鍵だけでメロディーを演奏する。最初のうちはリズムを中心に、黒鍵だけを使いピアノ連弾によるアンサンブルを楽しみながら鍵盤に触ることを経験する。ピアノ初心者であっても楽しめる即興演奏となっている。その後、指導者の伴奏に合わせて、旋律の即興演奏へと発展していく。

次にあげるのは、ピアノを習い始めて4か月の4歳の生徒が指導者の伴奏（譜1）に合わせ、即興的に演奏した旋律を採譜したものである。2種類の交互に演奏される和音を聴きながら、生徒はあらかじめC-D-E-F-Gに置いた右手の指で、ハ長調の旋律を即興的に演奏した。（譜2）旋律は5音から成る。同じメロディーが繰り返されながら、少しずつ変化していく。リズムは四分音符に八分音符が加わっていき、少しずつ動きを増していく。旋律を繰り返す間に次の動きを考えている。譜4はピアノを習い始め1年が経過する9歳の生徒による即興演奏を採譜したものである。指導者の伴奏（譜3）に合わせ、旋律を即興的に演奏する。両手の指をそれぞれG-A-B-C-Dに置き両手を使って演奏した。伴奏のリズムに合わせ、旋律には付点を取り入れている。右手と左手で交互に旋律を弾く動きも現れる。旋律の中に繰り返しや、和音の分散は見られず、自然な流れを持つ旋律を即興的に作っている。ピアノ曲のレパートリーが多い子どもの方が、より自然な旋律を即興演奏できることは容易に理解できる。

Ⅳ 終わりに

即興演奏は音楽活動の中でも特別な能力と技術を要する活動と捉えがちであるが、初めて音楽を学ぶ、読譜力のない幼児にとって既成曲を演奏することより容易であることは、昨年9月に訪れたアムステルダム音楽学校で確認できた。指導者は、リズム遊びを中心に、リトミックなどの幼児音楽教育によって、リズム感や、音感、ハーモニー、拍子感、テンポ感などを生徒に体験させ、遊びの中で音楽の要素を理解できるよう指導していた。アムステルダム音楽学校の幼児対象のプログラムにおける0歳から5歳を対象に行われている音楽教育では、即興演奏を積極的に取り入れている。オリエンテーションは、実技レッスンに向けた楽器選択の重要な機会となり、子どもたちは1年間で様々な楽器を体験する。彼らは読譜力のない全くの初心者で、楽器に触れ、音を出すことから始めるが、その際に即興演奏が用いられる。オリエンテーション終了後、自分に適した楽器を選び、個人レッスン、グループレッスン、アンサンブルレッスンを進度に合わせて行うシステムとなっている。日本のヤマハ音楽教室においても、リトミックから実技レッスンに移行していくプログラムとなっているが、そのシステムの中では、レッスンが鍵盤楽器に限られている。生徒たちが必ずしもピアノや電子オルガンに興味を持つわけではなく、レッスンに入った途端やめてしまう子どもは少なくない。アムステルダム音楽学校でピアノを学ぶ子どもたちはピアノを演奏することが好きである。8名のアンサンブルクラス（写真4）を対象に筆者が行ったアンケートにおいて、全員が練習とレッスンが好きだと答えている。即興演奏を取り入れたレッスンによって読譜力のみならず、和声感など自然に身につけている彼らは、音楽で表現することを楽しんでいる。このことから、即興能力を幼児音楽教育で伸ばすことが将来の音楽教育を豊かなものにすると考えられる。幼児が何かをしながら無意識に歌を歌っている場面に遭遇する。それも潜在的な即興能力とすれば、アムステルダム音楽学校での幼児は即興能力を持つことを前提とする幼児音楽教育によって、生涯に渡っての有意義な音楽教育を展開させていると言える。

これからの日本の音楽教育を発展させる幼児音楽教育のヒントがアムステルダム音楽学校にあると考える。



写真4 アンサンブルクラス

参考文献

- 1) 音楽教育学の未来 日本音楽教育学会 音楽之友社 p. 9 (2009)
- 2) Music, Thought, and Feeling under the Psychology of Music / Oxford / William Forde Thompson p. 199 (2009)

譜 1



譜 2

譜 3

Piano

譜 4

Piano

The musical score is written for piano and consists of four systems of two staves each. The first system is marked 'Piano'. The second system begins with a measure number '4'. The third system begins with a measure number '8'. The fourth system begins with a measure number '12'. The notation includes various musical symbols such as notes, rests, and dynamic markings.

~